

批評及び紹介

ペリオル・敦煌千佛洞圖録 第四輯

Mission Pelliot, I. Les Grottes de
Touen-Houang.

Tome Quatrième, Grottes III à I20 N.

本圖録はペリオル氏が敦煌千佛洞に於ける蒐集、及その研究集録出版計畫中の一部をなすもので、千佛洞圖録の第四輯である。第一輯乃至第三輯は已に本學報第拾壹卷第參號にその概略を紹介し、所見の概要を述べておいた。頃來更に同氏よりその第四輯を予に寄贈せらるゝの光榮を得たから、茲に本輯の概要を紹介して同氏の好意に酬いたいと思ふのである。

千佛洞が東洋學の上に各種の方面に於て貴重なる

資料を埋藏し、此の一大寶庫がペリオル氏等によりて開かれ、幾多價値ある資料が逐次に公刊せられて學界に提供せらるゝことは、東洋學の爲め寔に慶賀に堪へない次第である。本圖録第四輯に收むる所は第三輯末尾に接續して、千佛洞第百十一號洞より第百二十號に至る二十石室中、重要なる六石室内部の各壁畫・彫刻を、第百九十三圖より第百五十六圖に至る六十一圖版に複製收録したるもので、就中六朝及び唐初のものとも考ふべき貴重なる材料を本輯中に收められてあることは、特に注意すべきものであらう。左に圖版につきて逐次に主要なものを紹介することとする。

一、第百九十三圖・第百九十四圖

右二圖は第三輯最後の第百九十一圖・第百九十二

圖と共に石室第百十一號洞の内部で、前のものが同洞内中央佛壇であるに對し、此はその奥底の佛龕と右側壁面の三佛龕とを現はしたものである。此の彫刻及び壁畫は明に北魏時代の特徴ある技術を窺ふに

足るべきもので、これを雲崗・龍門の佛龕に見る如き優秀なる技巧を認むることを得ないにしても、生硬にして拙なるうちに、高さ調子を認むることが出来る。各佛龕の上部には北魏式の栱を施し、その内に葱茛苳模様の特種の裝飾を加へ、各龕の間壁面には菩薩羅漢その他の人物を描いてゐる。奥底のものは一龕中に二像を置き、何れも片足を半跏にした倚像であるが、右側壁面の佛龕は一龕一像で、結跏趺坐像と倚像とを交互にし、各龕とも左右に天人像を別に左右に對立させてゐる。その佛像は第百九十一圖及び第百九十二圖のものと比べて稍々相違の點もあるが、大體に於て同一時代と認めて差支へなさいものである。後者壁面の上段に、別に菩薩像を安置し

た小龕が並列し、龕の間には同じく人物像を圖し、左右に千佛像を配してゐる。その菩薩像の内に明かに彌勒下生像と見られるものがある。

二、第百九十五圖

本圖は第百十二號洞内入口右側壁面の繪畫で、二人の僧形を圖してゐる。各右肩上部に長方形の名型があり、内に西夏文字を書いてゐる、恐らく僧形にたいするものであらう。壁面の諸所に西夏及び西藏各文字を戯刻し、蒙古新字をも見うけられる、蓋し後世のもので、名型内の西夏文字も後に書かれたものなるかも知れぬ。繪畫の筆致は拙であるが、宋初を下るものではない。但しこれのみを以ては時代を判することは難い。

三、第百九十六圖・第百九十七圖

本圖は右室第百十四號洞奥底佛壇及び右側壁面の繪畫を現はし、中尊は釋迦說法の倚坐像で、左右に羅漢・菩薩・天人を列侍せしめたものである。彫刻の

手法には見るべきものがある、恐らく唐代のものであらう。壁畫は、西方極樂世界に於ける阿彌陀說法の儀相を圖したる淨土變相圖と名づくるもので、轉法輪の印相をあらはしてゐる。左右に觀音・勢至の二菩薩を配し、我が國の當麻曼陀羅などに比するべき圖様である。

四、第九十八圖乃至第二百三十二圖

此の三十五葉の圖版は右室第百十七號洞の内部壁面の繪畫で、千佛洞の壁畫中にも恐らく最も壯麗なるもの一であらう。描かれた年代は不明であるが、千佛洞中比較的新しいもので、恐らく唐末五代の初期のものと思はれる。中に就いて、第九十八圖よりも第二百二圖までの五圖は、同洞入口隧道兩壁の繪畫で、初めに左右兩側共に行像の樣を圖し、その奥には供養僧形の圖がある。特にその左壁のものは尼僧と認められる像であることは、頗る興味あるものである。各名型を附してあるが、その内に漢字と西

夏文字とを併せて記るされてゐることは此の年代を窺ひ知るに足るものであらう。筆致は此の洞内の他のものと比べて稍々異なる所があるが故に、此れ等僧尼の圖像は宋代のものであるかも知れぬ。

次に第二百三圖より第二十圖に至る九圖は、左側壁面を五區に分ちて描かれた各種變相圖で、その前壁下段には多數の盛裝せる婦人の供養列侍の圖がある。第三區以下の下段は經意による各種の世相を現はした圖が描かれてゐる。第二百十一圖より第二百十九圖までは同洞内右側面の壁畫で、左側と同様五區に劃して各種變相圖を現はし、下段には供養婦人の列侍する樣を圖してゐる。變相圖は左右共に第一區は、何れも靈山會上の釋迦說法を現はした淨土變で、以下各諸佛淨土の變相圖である。各色紙型内には經句が書かれてゐるが、文字小にして如何にしても読み難い恨みがある。經句による世相圖の一部であるがこれは明かに佛傳を圖したものである。第

二百十四圖は左側と同じく、下段の第二百十三圖は下段婦人供養者の一部で、その前方の一部を現はしてゐる。此には五婦人と一僧形があるが、その内中央の一人は特別の冠を著け、上の名型内には左の銘を記してある。

『受太傅曹延棟姬供養』

第三女天公主李氏爲新

大朝大子闡國天冊皇帝』

尤も此は左より右に讀むべきもので、特に天蓋を以て裝飾せられてゐるが故に、此の供養全體のことを意味するものであらう。その右方に大小三婦人あつて特別に髻髪のをなし、その上に「姑甥甘州聖天可汗的天公主供養」の文字を名型内に二行に現はしてゐる。以上は右壁のもので、左壁にも同様これと對する前方の位置に供養婦人を圖し、中前方の二人は髻髪で、次に特別の冠を著けた婦人がある。その二人目の名型内に「姉甘州聖天可汗夫人□□」の

文字が見られる。甘州は五代の時に回鶻可汗の牙帳のあつた地で、梁代中國を具とし自ら甥と稱し、可汗の妻は天公主と號してゐた、且つ回鶻傳に婦人は髻を總ねて髻とし、高五六寸、紅絹を以て之を囊ひの明文があるから、此等の婦人の髻髪の風俗と一致するものがある。即ち此等の供養者は回鶻可汗の一族をあらはしたもので、第七十四號石室に見える大寶子闡國大型大明天子とある所の千闡國王の供養像にたいし、此は回鶻可汗夫人等の發願によりて供養造室の由來を示すものであらうと察せられる。而して此の夫人が千闡國王の第三女であつた所より考ふれば、兩石室略々同時代に成りしものと推測するところが出来るのである。何れにしても、五代頃の回鶻の風俗を窺ひ知るを得る好資料と言はねばならぬ。因に、曩の銘文中、第三女天公主李氏とあるは、晋の天福三年千闡國王李聖天を大寶子闡國王に冊したとする李氏で、唐代の賜姓によるものである。第七十

四號石室の大寶于闐國は又此の大寶と一致するが故に、此が五代初期に成るものと信ぜられるのである。

次に第二百二十一圖以下第二百二十四圖に至る四圖は洞内奥底の壁畫で、五臺山圖である。圖は左方下端の太原府城に始まり、『河東道山門西口』を以て五臺山に入る様を圖し、左方下端に『河北道鎮州』あり、『河北道山門東口』に至る。五臺山は各臺各方面に分ち、各山中の諸寺塔・伽藍・靈跡を詳圖し、圖様に見るべきものが多い、此を清涼山志に對照するに各々相比當するものがあつて、唐末五代の五臺山の有様を知るべき好圖柄である。尤も此は變相圖又は曼荼羅風に描かれたものであるが、圖中に五臺山の大略を窺はれるのみならず、各種の塔型・伽藍を圖したるは建築史上にも好資料たるを失はぬ。第二百二十五圖は五臺山圖前面の佛壇で、今本尊を缺き、只後壁を存するのみである。壁面には上に天蓋を圖し、周圍は華蔓を以て填め、下部に多數の菩薩

天人等の圖がある。第二百二十六圖以下洞内天井の壁畫で、一面に小千佛を圖し、四隅に切り落して半圓形の四區を畫し、各區に四天王像を圖し、天井蓋面内には方圓を描き、内に龍形を畫き、方圓の郭内に雲網模様の華蔓を以て填めてゐる。要するに此の石室内部の壁畫は、後世の補修をも見受けられるが、大體に於て唐末五代の初期を下ることなきを信ずるものである。

五、第二百三十三圖乃至第二百四十三圖

此の十圖は石室第十八號洞内部の各部を現はしたもので、千佛洞中第十七號洞と共に注意すべきものである。その圖より見て第十七號洞より古きものがあるやうである。筆致は拙であるが唐の中期の頃のものであらう。第二百三十三圖は入口の壁面の畫で、樹下說相を圖し、下段十一婦人の小像を並べ描いてある。第三十五圖はその佛龕を現はし、棋の上部の紋様は六朝時代のものと同く趣を異にしてゐるが、

尚ほ拱の手法には六朝末期の面影を存してゐる。本尊は兩足を垂れた說法相の倚坐像で、左右脇に羅漢と天人がある、何れも後世の補修を経たものであるが、形體頗る整ふてゐる。佛龕兩側の壁面には右方上部に普賢、下に二菩薩立像がある。佛龕は二重で、

外側右方の内に天人あり、左方のは缺けてゐる、後壁面に一思惟の菩薩像があつて頗る見るべきものである。第二百三十六圖と第二百三十八圖とは所謂淨土變相圖で、左右兩壁前方にあり、右方のもの、即ち後圖は藥師淨土らしく、下段に頗る纖麗なる菩薩列侍の様を圖してゐる。第二百三十七圖は右壁最奥下部の一部で、極樂池中の部と、下方に地獄圖がある。池中には七寶蓮華あり、十數人を乗せたる大船が彼岸に渡る様を圖してゐるが、船中の屋形はマルマン彫刻などの乾陀羅彫刻に見ゆる印度の草庵舎式のもので、船體と共に注意すべき圖柄である。地獄圖は唐中期以後に多く作られ、吳道子などはその最

も長じたものと傳へらるゝが、此の地極圖はその作の早きものとして見るべきものであらう。第二百三十九圖は洞内左方の佛壇にて、本尊は兩足を垂れた倚坐の釋迦像である、背壁には左右に幢幡を持つた二菩薩像がある。

次に第二百四十二圖は同じ洞内P窟の佛壇で、本尊は舟形光背を負ひ、羅漢・天人・天王各左右に列侍したものである、その作は頗る優れたものである、次の第二百四十三圖は同じくQ窟内の天王像三軀と一天人の塑像であるが、共に甚しく毀損せられてゐる、然しその作風は勁健な所が認められる。

六、第二百四十四圖

第二百十九號石室内壁畫の一部で、上段壁畫右下方部と下段の上部の一端を現はしてある。上段の部は多くの百官が笏を持ちて侍立する様で、下段は列侍婦人の頭部二箇のみが現はれてゐる。婦人の顔貌の輪廓の筆致は第百十八號洞内下段壁面の菩薩と酷似

し、頭部に盛んなる裝飾を施した様は第百十一號洞の列侍婦人の頭部の裝飾と似たものがある。上段の百官の著けた冠は風俗史上の好資料であらう。

七、第二百四十五圖乃至第二百五十六圖

此の十二圖は石室第百二十號洞内部のもので、前の第百十七號及び第百十八號洞のものに次で見るべきものである。初めの三圖は、同洞内Fと稱する一窟の三方の佛龕で、奥底正面と左右兩側面とを現はし、左側には涅槃像がある、右側には七箇の各種の佛像が置かれてゐる。中央の本尊は佛龕内に結跏趺坐の釋迦像を安置し、羅漢・天人・天王左右に列侍し、龕外左右に蹲踞の獅子塑像がある。壁面は左右の隅に一對宛ツの菩薩像を畫さし外は、一面に小千佛を以て填めてゐる。彫刻はあまり優れては見られぬが、後世の修補を経たもので、かなりの作と考へられる。

第二百四十八圖以下の三圖は同洞内G窟の内壁であるが、特に第二百五十圖の正面奥底佛龕内壁の圖

様は頗る特種なもので、中央區劃内に二佛對坐して舍利を供養する様を認められ、其の左右に二十餘の天人を配してある。此の圖の下部に、龕内の佛像即ち本尊と、左右脇侍の羅漢・天人の頭が出てゐるが、甚だ優れたものと思はれる。殊に一羅漢と兩天人の面相は 盛唐期の作風を偲ばれる秀拔なものである、但し全體を知ることの出来ぬは遺憾である。何れも光背を負ひ、光背には水炎を施してゐる。第二百四十九圖は彌陀淨土變と稱するもので、有名な我が國の元興寺智光作と傳へられる智光曼陀羅に似た所がある圖柄で、外縁左右には觀無量壽經の經意に思はるゝものが圖示されてゐる。第二百四十八圖は左方の壁畫で、中央に天蓋を加へた觀世音菩薩の立像を描き、左右に各種人物の形相を圖してゐるが、その右下方に帆を上げた船をあらはしてある。風俗史上の好參考たるものであらう、觀音像及びその他

の技巧には頗る優れたものがある。

次に第二百五十一圖以下第二百五十六圖に至る六圖は同洞内N窟の内部壁畫で、その圖様筆致共に前二窟とその趣きが全く異つてゐて、むしろ第百十一號に見るものと相似た所が多い。第二百五十一圖は同窟内入口の左壁前面の壁畫で、中央に跏趺坐の説法像を畫さ、左右に二對の天人の如きものを配し、上に二對の羅漢像を加へ、これには各々名型が附せられてゐる。中尊は上に天蓋を加へ、舟形光背を負ひ光背には水炎を施し、内に多くの化佛が畫かれてゐる。これ等の下部に帶狀の横區があつて、其中に細密なる多數の男女供養者が左右相對して並列し、各人に名型を附してゐる。上方天井の一部に山中の圖がある、全體に圖様は古拙で、極めて興味あるものである。第二百五十二圖以下第二百五十六圖まではこれに續く窟内左側壁を示したもので、即ち壁の下方に四箇の佛龕を鑿ち、最左端の一には壇を設けて輪棒を安置し、その奥に佛の坐像を圖してゐるが、

他の龕中には何等をも認めない。内右端の一を除きし三龕の上部には惹型の拱を畫さ、拱中に惹琴模様を施し、炎型を加へた様は全く第百十一號洞のものと同様である。各龕の間に各種の姿態をした力士の像を圖してゐるが、その線に陰影のあるのは注意すべきものであらう。上部の壁畫は左端に步騎戰鬥の様をあらはし、中央に佛の説法を圖し、右端には二佛對坐し、左右に羅漢と飛行の天人とをあらはし、最上部の天井に接する壁面に帶區を作り、うちに十二の天人飛行の様を畫いてゐる。此れ等窟内壁畫は何れも古拙ではあるが頗る輕快で、恐らくは北魏末期のものと考えられるものがある。尙ほ此の窟内奥底壁面には特種の圖様の見るべきものがあるらしく、それ等は第五輯に收められるであらう。

以上は本圖録第四輯を概觀して所見を陳した所である、尙ほ一々につき細部の研究考察を必要とするものが多い。收むる所僅かに六洞に過ぎぬが、學界

の研究資料として頗る價值多きもので、佛畫及び藝術の研究としてはもとより、他の各方面にわたり専門的の考究を得ば斯學に貢獻する所大なるものがあることを信ずるものである。もとより邊陲の敦煌に於て、支那内地に見らるゝ如き盛んなるものではなくとも、各時代特種の技術或は風俗等につき、その幾分にも窺ひ知るを得ることは頗る興味あり、且つ學術上價值多きものと言はねばならぬ。

(白鳥庫吉)

アルス・アジアティカ 第三卷

「アルス・アジアティカ」(Ars Asiatica)が嚮にその第二卷を出してからもう數年になる。『Mémories Concernant l'Asie Orientale』の姉妹誌とも見られ、佛蘭西の東洋學に對する誇りの一つとも目なれてゐたこの出版物が、たとへ戦争其他の事情に依るとは云へ、

暫く世に出づることが途絶えてゐたことは學者の均しく深く遺憾に思つてゐた所であつた。が、幸にして私たちが夙に快視の念に堪へなかつたその第三卷は、昨春新にハノイ東洋學院の補助の下に典雅な裝ひを整へて遂に世に出づる事が出來た。これを喜ぶものは獨り私たち幾人かのみではないことと思ふ。東洋協會も頃者出版者より一本を惠する、榮を得たに對し、茲に取り敢へずその内容の一斑を抄録し、遅延乍ら些か寄贈者の好意に酬い度いと考へる。

この卷は『Sculptures Civiques de l'Inde』と題し、前出の兩卷と同じくギクトル・ゴルベフン(Victor Goloubeff)氏の監修に係るもので溼婆教雕刻に關する、氏其他三家の研究合せて四篇を輯め、其 Illustrationとして精巧な圖版(約半截大)四十七葉を附してある。(と云ふよりは、この圖版に對して四家各簡單なる解説各一篇を附してゐるといふ方が寧ろ適當であるかも知れない)。これらの圖版はいづれも巴里の